

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200238		
法人名	医療法人社団 明佑会		
事業所名	グループホームひかり		
所在地	熊本県八代市渡町1717番地		
自己評価作成日	令和4年2月5日	評価結果市町村受理日	令和4年3月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年2月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

静かな環境の中、山々を望む広いフロアで皆様と一緒にゆっくりと過ごして頂いています。ウッドデッキ前の季節ごとの花壇を鑑賞し季節感を感じて頂き、同敷地内の事業所との交流もあり知人との触れ合う場もあります。医療面では毎日の健康状態を隣接のクリニックへ報告し体調の変化があった場合には主治医より指示を仰ぎ対応しています。週2回のPTからの機能訓練を行い、毎日のアクティビティ活動を通し楽しみながら、体力の維持に努めています。来年度はホーム前に新設の医院が開設予定であり、さらなる医療との連携を深め安心した生活を送って頂けるよう支援を行います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設以来地域に密着した運営が住民の手による季節毎の花々に表われ、コロナ禍による制約の中で職員の積極的な挨拶や、資源回収への協力等地域の一員として活動している。外出支援の困難な状況に室内生活を創意工夫し、入居者の出来る力や得意分野を發揮させた充実した時間を提供している。開設時から継続する誕生日の手作りケーキや保存食作り等入居者の昔取った杵柄の發揮に、家族から届くミョウガの葉が『みょうが饅頭』作りが生かされ、自信回復へと反映させている。職員体制に大きな変動も無く、管理者を中心とした風通りの良い関係と自然体での対応及び根拠のある支援は重度化する入居者のケアに生かされていることが、ベクトルを同じくして関わる看取りケアに表われている。新設されている法人医院の存在と共に、ホームの地域交流室を住民のワクチン接種会場として提供する等地域への還元も視野にしており、更に地域医療・福祉の拠点として期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホームの玄関フロアに法人理念を掲示し共有している。朝のミーティング時に唱和する事で意識付ける事を取り組み継続している。クリニック等訪問された地域の方にも積極的に挨拶を行っている。	「手と手を取り合う 家族のような…」とする理念は、職員の日常のケア規範として息づき、疑似家族としてコロナ禍の現状にも真摯に向き合い、最高齢99歳、平均介護度3.4という重度化傾向にあるが、入居者が自信を持って様々なアクティビティ活動に勤しみ、出番作りが満足感として生かされている。地域への啓発も行き届き、地域交流室をワクチン接種会場として提供する等住民との交流の一環として活用されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス感染症予防の為、地域の方々と直接触れ合う交流は行えていない。月2回の資源回収日には選別の手伝いに行き、地域と繋がりを保つ事を続けている。隣のコンビニにも積極的に挨拶を行っている。買い物に行ったり職員がキャンペーン商品を購入し協力している。ウッドデッキ前の花壇はボランティアの方に作業して頂いている。	例年であれば保育園児たちとの相互交流(芋掘りなど)、高校生との交流等世代を超えた交流が行われていたが、コロナ感染症対策として入居者が交流する機会は少ない。職員は安心なまちづくりプロジェクト事業へ参画し、資源の日には分別作業に出向き、ボランティアの手による花壇の花植えや水やり等に地域住民との関係が表出し、地域の中で確固たる基盤が築かれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルスの影響で支援は限定されたが、家族への連絡、入居申し込み等の訪問の方にはアドバイスを行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により事業所内にて会議の場は中止されているが、2月毎にホームでの活動状況は郵送で報告をしている。家族訪問時には生活の様子を説明し意見を聞いている。	今年度は書類審議として運営推進会議の資料(入居状況、要介護度、インシデント・アクシデントや活動報告)等詳細に記録した会議資料を郵送し、電話による説明、及び意見等の聞き取りによりサービスに反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	本年度も運営推進会議は開催できなかったが、活動報告は行っている。入居に関して「住所地特例」について相談し回答を頂いた。	これまでは運営推進会議参加時に意見交換を行っていたが、コロナ禍により書面での開催としている。行政担当部署者に電話にて何度も住所の特例についての相談をする等何事も相談できる関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会で不適切ケアにて研修をい、ホームスタッフにも研修を行っている。不適切ケアについても話し合い、少なくしていきたい。	身体拘束廃止に向けた研修として資料配布や動画の視聴等により意識強化を図るとともに、不適切ケア(グレーゾーン)等を話し合い、職員が忙しい場面でつい出してしまう「ちょっと待って」や、頻回な排泄への訴えに対する返答などを注意喚起している。また、入居者の帰宅願望等個別の状況を把握するとともに、ホームは家であると捉えており、センサの使用もなく、職員が気づく力を発揮するとともに所在確認を徹底している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	本年度は権利擁護施設長研修、高齢者権利擁護養成員研修にリモートで参加し内容を伝えた。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	本年度は権利擁護施設長研修、高齢者権利擁護養成員研修にリモートで参加し内容を伝えた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明を行っている。不安や疑問点について、納得がいくまで説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に意見、要望を聞いている。今年度は看取りを3名行い、終末期の面会、寄り添う時間の期間を増やし対応した。病状もその都度報告し、家族、主治医、看護と連携して実施した。	コロナ感染の状況等により面会の有無を決定し、コロナ感染症が少し収まりを見せた12月には短期間ではあるが対面での面会を支援している。請求書とともに、コメントをしたため送付することで家族の安心感として生かされ、家族からもスイカなど好きな食べ物等が寄せられ、誕生日を彩っている。面会時に意見等を聞き取りする他、ラインでの相談等を苦情・受付表に残し、今後を生かすとしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年度初めの自身の目標設定時、中間面談時に意見要望を聞いている。又、朝夕のミーティング時も改善点を聞くようにしている。フロアの席順、利用者様の入浴の順番の見直し、ハンディ式掃除機を購入した。	朝・夕時の申し送り時に職員の意見等を聞き取りし、車椅子等の対応方法として入浴計画の見直し、備品等必要品は職員がら上申する体制としている。また、年度目標を全員が立て、中間面接により職員の意見や悩み等を聞き取りしている。今年は特にコロナ感染対策の一環として濃厚接触等も想定した勤務態勢としている。開設時からの管理者を中心とした風通しの良い関係が築かれ、外へ出れない分、室内での充実した生活ぶりに職員のケア姿勢が表われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	家族の介護、病院受診等の休日も事前の希望休勤務表作成時に確認している。突然の用事などに対しても勤務変更で対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度はリモート研修、動画研修に参加した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	八代ブロック会への参加が出来なかった。研修と交流もあまり出来なかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホームへの入居前には必ずご本人様に会い、心身の状態や本人の思いに向き合うよう努め職員との信頼関係が早く築けるように繋げている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ホームへの入居前にご家族様が求められる事や、これまでのご家族様の苦労や経緯を傾聴し、ホームでどの様な対応が出来るか、情報を頂き話し合いをした。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	モニタリングを充分行い、ご家族、本人の意向に沿ったサービスの提案、他サービスについても促しを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	午前、午後アクティビティ活動を行い一緒にラジオ体操、レクレーションを行っている。おやつ作り、食器片付け、洗濯物干しを行い生活を共にする対応を行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	訪問、面会時にはなるべく声掛け、会話をして頂くようにしているが、今年度は新型コロナウイルスの影響でご家族様との面会、交流の機会が少なかった。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナウイルス感染防止の為、行動面会に制限があった。11月頃より面会の緩和を行い12月までは短時間の面会が出来た。終末期の方には面会時間の拡大を行い対応した。一時帰宅の支援も行った。	今まで出来ていたことが入居しても継続して出来る所であると捉えたケア姿勢は、手芸教室として編み物等に興じたり、手作りマスクを全員で作る等、馴染みの場所へ出かけることは制限もある中で出来る限り関係性を継続させている。孫の結婚式への参列を職員が叶えたり、コロナ感染が落ち着いた時期に午後から夕食までの時間を自宅で過ごすことを支援されている。また茗荷饅頭、おはぎ作り、干し大根作り等これまで入居者がされてきたであろうことへの挑戦が自信回復として生かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士が良い関係でいられるように職員が間に入り会話をを行い、楽しい雰囲気作りを行っている。昔話や知人の話、子供さんの話、孫さんの成長の話を変えながら会話をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	クリニック時受診の際には声掛けを行い様子を聞いている。洋服やタオルを頂いた。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	「〇〇して良いでしょうか」と本人様の意向を確認しながらケアを行っている。困難な方は表情仕草をみながら対応し、本人様が心地よいケアを行うようにしている。	入居者との会話の中から希望等を引き出し、判断の出来る方や返事と共に行動も出来る方等には、意思を確認しケアに反映させている。意思疎通困難や自らは訴えが無い場合など職員から声を掛けたり、体調や食事量等変化に気を配っている。1対1の時間や、入居者同士の会話等からも推察し本人本位になるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族様に話を聞いたり、ご本人様に若いころの話をお聞いている。本人の希望に添えるよう確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の体調管理はバイタル測定、食事量、水分量、排泄等をチェックし状態を把握している。一人一人の一日の過ごし方については意向を主にして対応している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者様の担当を決めて、課題、意見を聞き取り、計画に反映するようにしている。PTにも課題を聞き介護計画に取り入れた。ご家族様に聞き取りを行うと現状のこのままでいてほしいとの意見が多かった。	入居者や家族の思い等を基に、まずは出来事等を詳細にチェックし、家族・ケアマネジャー、担当職員等との話し合いを原案として、本人や家族に説明し合意のもと暫定プランを作成している。長期目標毎にモニタリングを行い、ケア継続を見極めると共に、再度アセスメントを取り直し、PT等の意見を新たなプランを反映させている。また、ターミナル期には家族の苦痛無く過して欲しい等を踏まえ、安楽に過すことが出来ることや他の入居者と一緒に過したいとする本人の希望をプランに反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	タブレットを活用した他事業との情報共有やグループホーム内でもケア記録を参考にしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	敷地内の他事業所との交流は減少したが、火曜日木曜日はPTによる機能訓練、可動域訓練、マッサージを行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年度は地域との交流は少なかったが、感染対策を重視し、安全面に気をつけて自宅への外出を支援した。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医より2週間に一回の定期受診を実施している。毎日バイタル測定を行い体調に変化があった場合はクリニックに報告し情報は主治医と共有している。ご家族に終末期に受けたい医療を記入して頂き24時間の医療連携を行った。	協力医(法人医療機関)がかかりつけ医であり2週間毎の往診として、主治医との連携や本体看護師にも普段から入居者の健康状態を小まめに報告し、アドバイスを受けている。他科受診での検査や病状によっては、家族による対応も行われている。歯科は訪問診療として、必要時に依頼している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日バイタル測定し変化があった場合は速やかに報告をし指示を仰ぎ、情報を共有している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	クリニック、連携室との対応等入退院時は連絡を行う。本年度は対象者はいなかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医とのターミナル時の説明からご家族と同席し、今後の病状説明、起こりうる変化予測を聞いて方針を理解し看取りの対応を行った。今年度は10月より3人の方の看取りを実施し、訪問看護とともに24時間体制で支援しご家族より感謝の言葉を頂いた。	入居時に看取りケアについて説明し、同意書をお互いに見せ合っている。主治医よりターミナルケアの説明が家族へ行われている。主治医や訪問看護、職員の連携により4名の方の看取りを支援している。CDを持ち込み好きな演歌を聞きながら過ごされた方、高カロリー食(牛乳・バナナ・生クリーム・練乳など)を準備しのご越えに気を付けながらの提供、感染症の落ち着いた時期に一時帰宅(半日)など、一人ひとりの思いに寄り添い終末期を支援している。	看取り支援は職員にとっても色々な思いがつのったと思われるが、家族からの感謝の言葉が励みになったと語っている。感染症への対応と家族の面会など、今後の課題も出されている。日頃の関わりを大切にしたい支援が継続されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	本年度は新型コロナウイルスに特化し発症時のゾーニング、シュミレーション、防護服の着脱の訓練を行った。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策委員会を定期的開催し災害後の反省を踏まえ、法人、部署のBCPの作成を検討。水、食料の備蓄は期限を確認しその都度使用し、補充している。大雨、台風時の避難所情報は市へ問い合わせ確認した。	昼間を想定して災訓練を2回(水消火、避難経路確認、通報)実施している。訓練では真剣さに欠けた点があがり、反省と今後活かすこととしている。火災への対応としてコンセントのチェックや、建物周辺に燃えるものはないか等確認している。ホームは河川に近いことから水害への意識は高く、8月に大雨(避難警報発令)の際には、避難準備を行っている。災害備蓄はリストを作成し、食料については職員による味見を行っている。	防災対策のオンライン研修や洪水、土砂災害を想定した訓練なども確認された。河川も近く、今後も安全対策の強化に取り組まれることが期待される。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ケアをする際は、ご本人の気持ちを大切に考え、さりげないケアを心がける事で尊厳やプライバシーを保てるよう務めている。声掛けには命令口調にならないように職員同士が注意している。	入居者の尊厳やプライバシーに配慮した支援について、日頃から職員間で意識を持ってケアに当たっている。入居者同士の会話(強い口調など)から、雰囲気や壊すことのないよう席の配置には検討を重ねている。活動の中でお化粧や個々に応じてマニキュア、訪問カットの利用などおしゃれや身だしなみの支援に努めている。特に正月前など節目にはカットにより髪型を整える事で安心されている。職員の守秘義務の徹底の他、家族には掲示物や広報誌等において写真等同意を得て使用している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ケアの際には本人の理解を得て対応を行っている。食事の席の選定、余暇の時間は希望される事が出来るよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるが、その日の気分や体調を確認し、職員の都合だけで過ごす事のないよう決定する機会を大切に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴準備の際に一緒に洋服を選んでる。また2か月に一回散髪を行い、爪切り、ヒゲソリは定期的に行っている。ネイル、お化粧品も行った。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	干し柿、ポテトチップ、ドーナツ、梅干しなど一緒に作った、その梅干しを提供すると喜ばれる。台拭き、お盆拭き、食器洗いも一緒に行っている。ご飯に岩海苔、ふりかけ、漬け物も用意した。	入居者への関わりを充実できるよう、現在は本体厨房で調理されたものを、個々の嚥下力に応じた食形態で提供し、ペースト食には見た目でも楽しんでもらえるよう、工夫している。職員は感染症対策として、現在は弁当などを休憩を兼ねて摂っている。開設時から、デコレーションの工夫や、家族から届けられたスイカを器に使用したフルーツポンチをはじめとして、毎回職員のアイデアが活かされた誕生会を開催している。また、饅頭(とげの葉・みょうが・芋など)作りや大根葉漬、梅干し・干し柿作り等に先人の知恵が活かされている。	入居者の食への出番は数多く、スーパーボランティアの文字が縫われたエプロンを付け洗い物をされる方もおられる。今後も入居者の楽しみや励み等に繋がるよう継続した取り組みに期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食欲減の方には栄養価の高いゼリー、補助食品にて対応し、お菓子が好きな方にはおやつとの盛り合わせを提供した。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	コロナ禍により週1回行っていた訪問歯科での口腔ケアは利用できなかった。毎食後声かけ、介助し口腔ケアを行った。就寝前は義歯を洗浄後洗浄液につけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々のパターンに合わせて定時に誘導、声掛けを行っている。日中はトイレの訴えの方には速やかに対応を行っている。夜間は2名ポータブルトイレを使用している。トイレの訴えが頻回な入居者様には手作業に集中して頂く工夫をしている。	個々に応じた排泄支援により、自立の継続や可能な限り失敗の無いように努めている。自立の方で場所がわからない方には、職員が誘導し安心して排泄ができるようにしている。殆どの方がリハビリパンツの使用であるが、布やオムツで過ごされる方、夜間のみポータブルトイレなど支援方法についても職員間で検討を重ねていることが、聞き取りなどからも確認された。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日乳製品や、バナナ等の食物繊維を提供している。又毎日午前午後のアクティビティ活動に体操を取り入れ自然排泄を促し、必要に応じ看護師や主治医に相談し排便コントロールを行っている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	更衣室と浴室の温度差が無いように十分に温めてから案内しヒートショックに気をつけた。本人の希望、体調を聞きながら誘導を行い、晚白柚風呂や入浴剤を時折使用し喜ばれた。	冬場は3回入浴、発汗の多い夏場は回数を増やし、快適に過ごせるよう支援している。更衣室や浴槽が広いことから、温度管理には十分配慮し、身体状況からシャワー浴が中心の方には特に温まってもらえるよう、かけ湯など工夫している。拒否をされる方には、職員や日を変更しながら、気持ちが向かれた時に支援している。入浴の順番も希望だけではなく、安全な支援ができるよう、独歩や車いす利用者のバランスを考慮して決定している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、夜間心地よく眠りにつけるよう生活リズムを整える事に努めている。起床時刻の早い方には午睡で休息できるようフロア畳所にクッション、膝掛、掛布を常備している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	定期受診前や必要に応じ軟膏の残量や患部の症状の報告を行っている。また新しい薬が処方された時は、処方内容、効能など引継ぎ、皆で周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日、午前と午後にアクティビティの時間を設け体操や、色々なゲームを行っている。又、季節にイベントやお誕生会も行っている。お茶の時間は紅茶、ココア、コーヒー、昆布茶、シソジュースも用意した。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	午後からのアクティビティ活動で感染予防に気を付けながら、ホーム周辺の散歩や神社、河川敷、清流高校などに出かけた。2月頃に出来る近くのパン屋へ行く予定を楽しみにされている。	地域住民の支援により庭先には季節の花が咲きほこり、日々の散歩や日光浴の楽しみに生かされている。感染症により外出を控えている状況にホーム内でのアクティビティを創意工夫し、地域の高校の入学式を楽しんでみたり(入学式の看板の前での写真の撮影)、桜見ドライブ等職員が工夫を凝らしながら今できる外出を支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍の為、買い物外出は出来なかったが、本人が欲しい物、食べたい物等あれば、職員が買い物をしてきて本人に渡している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人より希望があれば電話をしている。手紙が届くと本人に渡し一緒に見たり、文字が読めない方には代読している。要望があれば代筆を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温暖な時はウッドデッキで日光浴を行っている。毎月入居者様と一緒に季節に合った壁紙製作を行っている。フロアの窓が大きい為、常にカーテンを開け、外の景色、天気、季節感がわかるようにしている。換気の際は窓を開け、外気の匂い、温度で風を感じて頂いている。	入居者が日中の殆どを過ごすリビングホールは換気や掃除、消毒など感染症対策を徹底している。毎週木曜日は手芸教室として編み物や作品等が壁面を飾り、中には2ヶ月かけて作ったベストを家族に贈られる等充実した時間を過ごされている。ウッドデッキは日光浴や衣類干し、秋には干し柿を下げるなど活用の多い場所である。就寝前に数人で、会話と共にお茶やお菓子を楽しむ等コロナ禍にあっても、普通の日常生活が入居者の生きる喜びとして生かされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアのテレビ前にソファを設置し、テレビを観たり、会話をしたり出来るような空間を作っている。窓際にもテーブル席を設け、誰でもくつろげる空間にしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時の面談を行い本人が使い慣れた物、タンス、椅子等を持って来て頂き、設置している。布団干し、寝具の洗濯を行い、清潔にしている。衣替えはコロナ禍の影響で職員が行った。	入居前に居室内を確認してもらっており、メジャーで計測した後、荷物を入れられる家族もおられる。タンスや衣装ケース、こたつ、座椅子などの他、位牌や遺影等が持ち込まれている。職員は居室内の掃除や清潔な寝具を管理し、現在、家族に代わって衣替えなどは職員が行い、不足や必要な品があれば家族に伝えている。掃除も徹底し、居心地の良い環境を整備している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室内は基本的にバリアフリーである。フロア内は動線には全て手すりを設置しており安心して移動できるよう安全の確保を行っている		